

野の小さな墓

(水野仙子を葬る)

田山花袋

昨年十一月頃だつたと思ふ。不治の病は病にあらず、希くは生の執着を擺脫せよ。かう私は草津のかの女の許に言つてやつた。しかし病を持たないものが、不治の病に罹つてゐるものに對して、さういふことを言つてやるのは、餘り慈悲深いことではなかつた。いくらか残酷な感じもした。しかもそれを

敢てしたのは、その徹底裡から新しい生命の復活を萬一に庶幾したからであつた。

今はそれも徒爾に歸した。かの女は五月の下旬に山中の病院の一室でさびしく死んだ。

草津の山の中のさまが私に思ひ出されて來た。會つて二十年前に一度行つたことのある山の高原の上の

温泉場が、烈しい湯の縦横に町の中を横流する温泉場が、または信州の澁温泉から大きな峠を越して、白根の噴火坑を見て、そして辛うじてやつて來たその草津の町のさまが――。

岩代の須賀川町の一商家に生れて、文才があつたがために東京に出て、文壇にもかなりにも名を知られて、そして山の中の病院の一室に死んで行つたかの女！ 私にはいろいろな追憶がそれからそれへと思ひ出されて來た。

矢張、早く死ぬために完成された才であつたのか。

「暗い家」などといふすぐれた短篇はまだ十六か十

七の時に書かれたものであつた。祖母に伴れられてお寺に行つたことを書いた寫生風のものなどは、或

「死んだよ、あのお貞さんが——」

「え、あのお貞さんが、何處で——」

かう姉の女の兒は目を腫るやうにした。

「草津ツていふところで」

「……………」

流石に悲しいと見えて、黙つて、女の兒は眼に涙をためた。

「お前が小さい時、大變世話になつたんだがな。覚えてゐるかな」

「……………」

私には、私の家の三疊にかの女がゐた頃のことに限りに思ひだされて來た。(人間は何うせ死んで行くのである。何も残り多いことはない。若くつて死んだのは惜しいけれど、兎に角かの女の持つたものをあれだけでも世に出してゐるのはせめてものことだ。世間には唯生れてそして死ぬものも澤山にある)こんなことを私は考へた。

「娘」といふ作があつた。それは娘から女になつて行く心の移り變りを書いたものであつたが、その心理の描寫は、ちよつと他に類のない位によく描かれてあつた。無論それは自分の閱歷を基礎にして書いたものであつたが、しかもそれが非常に巧みに藝術化されてあつて、決して單なる *Teh—Roman* の弊に落ちることにはなかつた。かの女の閱歷であると共に、すべての娘の心の閱歷であらねばならない要素が澤山に澤山にあつた。主客の融合の度數が非常に高い程度のところにあつた。

しかし、さうした才能を持つて居りながら、それを何の位まで、自己の意識の竈の火の中に入れて燃焼させたか？ 肉體と精神とが何の位の度數まで近く相解れて行つてゐたか？ それは私にはちよつと疑問だ。或は『娘』を書く頃には、無意識に、唯、その天分によつて書いてゐはしなかつたか。何うして、かういふものが書けるかをすら自分に知らずに書いてゐはしなかつたか。

従つてかの女に取つては、實際と藝術との問題は、始めは何の事はないやうに見えて居りながら、いざそれに正面に相對するといふ形に立つてからは、かなり大きな問題であつたらしかつた。矢張、あらゆる作家が打突つて苦しむやうに、かの女も藝術と實際との問題に苦んだに相違なかつた。

かの女が無意識に持つてゐた主客融合は、このために少くとも大きな影響を一つ受けなければならなくなつた。戀に目覺め、世間に目覺めたかの女は、今までのやうに、藝術の殿堂の上にデツとして坐つてゐることが出来なくなつた。かの女は世間へ下りて來た。また肉體の中へ入つて行つた。

藝術と生活の一致は、その終極の理想であることは争はれない事實である。しかしこれは始めから容易に得られることではなくつて、或は生活に、或は藝術に、時には五分五分、又は七分三分、四分六分といふやうに傾いたり平衡を得たりして、段々進んで行くことであつて、その一上一下、一進一退は

如何なる作者も皆なやらなければならぬものである。かの女もかなり深くこの一上一下には疲れたらしかつた。

従つてかの女には、形式の打破や、心理の轉變や、生活の藝術壓迫や、または藝術の生活壓迫が絶えず巴渦を卷いてゐたらしかつた。一時はかの女は所謂自然主義から離れ、觀察から離れ、解剖から離れ、飽まで主觀的になつて、すべてを自己の心の泉にたよらうとしたほどであつた。しかし、これはかの女が弱くなつたためであつたことを誰も氣が附くものになかつた。

私の考へでは、かの女がさうなつて行くのは惜しかつた。それは無論、一時の混亂にすぎないと思つてゐたけれども、またその混亂から本當の芽が出て來ることを期待してゐたがために、或は却つて、その方が好いかも知れないと思つてはゐたけれども、しかし、矢張それは惜しかつた。そのため、かの女は私の家にやつて來る度に、いつも『皮肉な師

匠』を發見したに相違なかつた。何故なら、私はいつも『反抗勝ちな女の弟子』をかの女の態度に發見したから。

しかし、何は措いても、誠實なかの女であつたことは争はれなかつた。

思ふに、かの女は藝術にも誠實であつたと共に、生活にも誠實であつたに相違ない。夫にも、舅にも、夫の兄弟にも誠實であつたに相違ない。私に反抗するやうに見えたのも、矢張、私に對して誠實であつたからであつた。

私の家にある時分には、細かい日記をかの女はつけてゐた。その中には、私のことなどがいろいろに批評的に書いてあつた。『奥さんばかりぢやない、先生もわるい……』こんな風に書いてあつた。それも道理である。その頃の私は、思ひきつたデカダンであり、悪魔であつたから……。しかし、その時分の方が、矢張、私も強かつた。

かの女は、書くものに對しては、常に丁寧であつた。決して筆は早い方ではなかつた。『何うも一日書いて四五枚しか書けないんですもの』かうした言葉を私は私の家にある時分によく聞いた。従つてかの女の作には割合に冗なところがない。また書いたものにも拙いものがない。何うでも好いと言つたやうなものがない。残つた作品は餘り多いといふ方ではないが、決して詰らない作はないやうに私は思ふ。

骨を持つて來た麻布の宅に、私は前田君と一緒に出かけて行つた。

それはさびしい一夜であつたが、しかしそこに集つた人達は、夫とか、兄弟とか、師とか、すべて親しい人達の限りであつたことは、かの女も満足に思ふであらうと私は思つた。草津で撮した猫を抱いた寫眞がそこに灯の前に置いてあつた。その眼がはつきりしてゐて、まだそこにかの女の魂が生きてゐるやうな氣がした。

『好く撮れてゐますね、これは——』

かう私は言つた。聞くと、かの女も生前、その寫眞が氣に入つてゐて、死んだら、これを靈前に飾つて貰ひたいなどと言つてゐたといふことであつた。草津での話が段々人達の口の上つた。

『もう、一月ほど前には、餘程やさしくなつてゐました』

かうかの女の田舎の姉は話した。『娘』の中に書いてある姉、かの女が唯一の力と頼みにした姉である。また姉の方から言つては、自分の妹にさうした小説家の出たことを誇りにし、何うかしてその病氣を治はさせてやらうと長い間苦心した姉である。その姉の話は、さつぱりとして、何の悲しいトオンを帯びてゐなかつたけれども、しかし、私にはいろいろな悲哀を催させた。死に近く、洗禮を受けさせやうとして、牧師がやつと來た時には、手を振つて、自からそれを斷つたといふ話であつたが、それにも私は藝術家の雄々しさを感じた。

姉は『沈み行く日』のモデルの話などをした。

葬式の日には曇つた日であつた。梅雨に近く、野には卯の花が白く咲いてゐたり、水の増した小川の岸に名もない赤い花が點綴されてあつたりした、麥は黄熟して既にあら方刈られ、ところに由つては、田植の始つたところなどもあつた。

雜司ヶ谷の墓地——大きな櫛のある路の左側、その小さな、まだ周圍に垣も何もつくらない、いかにも野中のさびしさを人々に思はせるやうな墓地の穴の中に、髪の毛を長くした川浪君は、抱へて來たかの女の遺骨を靜かに下した。墓は忽ちにして築き上げられた。

送つて行つた人々は兄君の手から銘々櫛の一枝を貰つて、それを墓前の白木の机の上に置いて手を合せた。

編輯後記

◆梅雨に入つてから、毎日鬱陶しい天氣が続く、時節柄とは言ひながら、時候も寒かつたり蒸暑かつたりする。身體が持ちにくく、頭が重く歴へつけられるやうだ。此際特に讀者諸君の健康を祈らざるを得ない。

◆今月はどういふ廻り合せであつたか、本誌と關係淺からぬ二人の藝術家の悲しい計報に接した。一人は女流作家水野仙子女史で、今一人は新進の洋畫家關根正二氏である。水野

女史は本誌出身の唯一の女流作家ともいふべく、十餘年前、まだ十七八のうら若き一少女で、本誌の一投書家であつた時代に於て、當時の本誌主筆田山花袋氏にその天稟の才を認められ、後上京して作家生活をなすに至つたのであつた。病氣その他の爲に、その作品の数は必ずしも多いとは言へないが、その作風の健實と藝術乃至生活に對する誠實とを以て

現今寂寥を極めつゝある女流作家中に、最も未來ある作家として重んぜられて居たが、宿痼遂に癒えず溘焉として逝かれたのは、文壇の爲めにも痛惜に堪へない次第である。本誌に掲げられた小説『酔ひたる商人』は、女史が死に先つて自ら遠く草津の病院より寄せられたのであるが、未だその發表を見ざる中に逝かれたのは女史にとつても返す可く遺憾なことであつた。吾等はこの悲しい尊い絶筆によつてせめても此の薄倅なる作家の儚を偲びたい。

尙ほ田山花袋氏の追悼文は、女史の生前を語つて最も哀切なるものである。

◆關根正二氏の計は、本誌の締切間際に當つて突然傳へられた。取敢へず消息欄に之を報じて置いたが、氏は天才的青年畫家として最もその將來を矚目され、常に洗ふが如き赤貧と戦ひつゝ、藝術創作に精進努力し、本誌にも表紙口繪挿畫等屢とその作品を寄せられたが、今突如としてその計を開き、我國美術界の一大損失として、吾等は讀者と共に深く悼惜せざるを得ない。而も享年僅かに二十一といふに至つては、その夭折を悲しむの情の一層切なるものがある。

◆今度編輯上の都合により、小説論文以外の各種投稿締切期日を毎月二十五日に繰り上げることにした。但し八月號の分は従前の通り七月三日に締切り、九月號分より新規定を實施する。即ち九月號分は七月二十五日に爾後毎月二十五日に締切るのである。尙ほ別項(二二五頁)に所載の通り、「論壇」及び「通信」は、特に投稿家の便を圖り前月五日締切に繰り下げることにした。

◆次號即ち八月號は前號にも一寸豫告して置いた通り夏季特別號とし、創作評論小品紀行その他の記事を精選し、編輯にも新工夫を凝らし、銷夏の讀み物として最も興味深きものを提供する積りである。内容は特に之を發表せず、その發行の日を刮目して待たれんことを乞ふ。

文章世界 毎月一回發行

改正定價 振替東京二四〇番
一冊 金參拾五錢 (郵税) (外埠郵代)

▲増刊及増大は價格不同に付前金引拂込の方は其前金より差引計算可任又定價改正の場合に其改正額により計算可任

四冊 (郵税共) 前金壹圓四拾貳錢
八冊 (郵税共) 前金貳圓七拾貳錢
十二冊 (郵税共) 前金四圓貳錢
十六冊 (郵税共) 前金五圓貳拾貳錢

廣告料の定價並に掲載手續は御申越次第御報可申上候

大正八年六月廿五日印刷納本(第十四卷)
大正八年七月一日發行(第七號)

不許複製

編輯兼 加能 作次郎
發行人 高橋 季吉
印刷所 株式會社博文館印刷所
小石川區久堅町百八番地

發行所 東京市日本橋區 株式會社 博文館

○御注文の代金は總て前金にて申受けます
○但送金の際にはなるべく振替貯金によられ
たし、博文館の振替貯金口座番號は東京

二四〇番で御座います
○郵便切手代用は必ず一割増に願ひます

○御注文の際は雜誌名及號數の御指定を願
ひます

○轉居の際は御購讀の雜誌名及新舊兩方の
住所を明瞭に御通知願ひます

○本館圖書目錄御望の方は御申込次第進呈
いたします